

カトリック 仙台教区報

2016年1月3日 No.227
 発行
 カトリック仙台司教区
 〒980-0014
 仙台市青葉区本町 1-2-12
 Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
 発行責任 広報委員会
 URL <http://sendai.catholic.jp/>

主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます

2016年 司教年頭書簡
 いくしみの特別聖年『イエス・キリスト、
 父のいくしみのみ顔』を受けて
 司教 マルチノ 平賀 徹夫

仙台教区の皆さま、年が改 想しなればなりません。いくし
 まり2016年を迎えました。しみは喜びの源、静けさと平和の
 今年も、三位一体の神を信 泉です。いくしみは、わたした
 じる信仰を大切に
 し、その信仰の恵み
 のうちに招き入れ
 ていただいたこと
 を喜び合いながら
 わたしたちに期待
 されていることを
 探し求め、力を合わ
 せてそれを果たし
 ていくように努め
 る一年としたいと
 思います。幸いにも
 フランシスコ教皇
 様は今年を「いくし
 みの特別聖年」と
 公布し、『イエス・
 キリスト、父のいく
 くしみのみ顔』と題する大勅
 書を発表されました。教皇様
 はその中で、「わたしたちは、
 つねにいくしみの神秘を観



いくしみの特別聖年の扉を開く式(元寺小路教会)

いくしみの特別聖年



2015・12・8

～2016・11・20

わたしたちは、つねにい
 つくしみの神秘を観想し
 なければなりません。い
 つくしみは喜びの源、静け
 さと平和の泉です。いくし
 みは、わたしたちの救いに
 不可欠です。いくしみ
 …、それは三位一体の神秘
 を明らかにすることばで
 す。いくしみ…、それは
 神がそれゆえにわたした
 ちに会いに来られる、究極
 の最高の行為です。いく
 しみ…、それは人生の旅路
 で出会う兄弟と真摯に向
 き合うとき、それぞれの心
 で働く、基本となる法で
 す。

(いくしみ特別聖年大勅書2)

ちの救いに不可欠です」と教
 えます(大勅書2)。ぜひ大勅書
 手に取り、神のいくしみにつ
 て深く味わいながら教皇様の教
 えを受けとめ、その方針に沿う具

体的な活動を考えて進みたい
 と思います。以下に大勅書から5つ
 の箇条を取り上げてみました。大
 勅書が示唆する箇条は他にもあ
 りますが、その中の一つでも二つ
 でも今年の活動として掲げてみ
 てはいかがでしょうか。

1 わたしたちはいくしみを年々
 るように招かれています。(大勅書9)

教皇さまはこう教えています。
 「イエスは、いくしみは御父の
 わざであるだけでなく、御父のま
 ことの子を見分けるための基準
 にもなると断言しています。つま
 りわたしたちは、いくしみを生
 きるよう招かれています。それは
 わたしたちがまずいくしみを
 受けたからです。聖書では、い
 つくしみは、わたしたちへと向けら
 れた神の行為を指すキーワード
 です。神のいくしみは、わたし
 たちに対する神の責務なのです。
 神は責任を感じています。わたし
 たちの幸せを望み、わたしたちが
 幸福で、喜びと平和に満たされて
 いるのを見たいのです。キリスト
 者のいくしみに満ちた愛は、そ
 の神の愛と同じ波長をもたねばな
 りません。御父がいくしみ深い

生命の泉

2015年12月8日から「いくしみの特
 別聖年」が始まった▼聖年はイスラエルの民が
 エジプトから解放され、約束の地に辿り着いた
 ことを記念した7年毎のヨベルの年に由来す
 る。その7倍の50年目にはより盛大に祝った
 ▼嗣業の地を分けてもらい、他国人が寄留するほどに
 豊かになった。その感謝の気持ちから土地を休ませ、
 奴隷ばかりか家畜も解放した▼この伝統を教会が引
 き継いだ。13世紀から聖年として始まったが今度の
 聖年はポーランドの聖女ファウスティナ・コヴァル
 スカに託された「わが娘よ、考えられないほどの私の慈
 しみについて全世界に告げなさい。その祭日には私の
 優しいいくしみの深淵が開く。その祭日にゆるしの
 秘跡を受け、ご聖体を拝領する人は完全な罪と罰の赦
 しを得る。どんなに罪深くても」によっている▼この
 聖年を知ることは神が身近におられることを知るき
 っかけとなり私たちの日常生活を劇的に変える。とい
 うのも彼女の霊的な記録が日記として残されたから
 だ▼彼女は1905年グオゴヴィエツという寒村に
 10人兄弟の3番目として生まれた。家は貧しく父は
 農家以外に大工の仕事もしていた。ロシア統治下のポ
 ーランドで学校は閉鎖され、12歳の時2年間だけ通
 った▼7歳の時に石命を感じ、18歳で修道女になっ
 た▼1938年10月結核で帰天。33歳の短い生涯であ
 ったが、死後彼女の取り次ぎによって多くの奇跡が報告
 され1968年列聖調査が始まった。列聖は2000
 年4月30日。託された「いくしみの祭日」は20
 01年に実現した▼霊的指導者が聖女の見た幻視の
 内容を正しく理解すべく日記をつけさせた▼彼女は
 同僚のいじめにあたり、ありとあらゆる苦しみを味
 わった。支部を転々とし、料理番、庭師、門番など下
 働きを忠実にこなしながらも隠れた霊的生活はすば
 らしい。「あなたは苦しむと予告されたがその苦し
 みは「ミサの間私と親しく一致しなさい。その贖いの
 ために私の血と傷を私の父に捧げなさい」とキリスト
 ご自身が背負ってくださった。これこそ「いくしみ」
 です。自分のかかえる苦しみを主と共に担う▼短い生
 涯の後に彼女の本当の活動が始まった▼私たちが「い
 つくしみ」を実感できるのは最もプライベートな悩み
 に神のいくしみが様々な手で寄り添ってくださる
 時だ。(守)



『いつくしみは神のわたしたちへの責務』 司教 平賀 徹夫

いつくしみの特別聖年公布の大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』第9項の末尾近くに、フランシスコ教皇様は次のように記しています。「聖書では、いつくしみは、わたしたちへと向けられた神の行為を指すキーワードです。… 神のいつくしみは、わたしたちに対する神の責務なのです。神は責任を感じています。わたしたちの幸せを望み、わたしたちが幸福で、喜びと平和に満たされているのを見たいのです」。

これを読んだ最初は、どういう意味なのかちょっとつかみきれませんでした。二度三度と読み返しながら考えました。わたしたち人間に対する責務として、わたしたち人間に対して責任を感じるののでいつくしみを注がれるのだとしたら、責務あるいは責任を感じなければならない理由はどこにあるのかと。旧約聖書『創世記』1章の「ご自分にかたどって人間を創造した」ことに対する責任もあるかなと思ったり、『知恵の書』11章の「全能のゆえに、あなたはすべての人をあわれみ、回心させようとして人々の罪を見過ごされる。あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。… 命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはすべてをいとおしまれる」もあるかもしれない。しかしそれ以上に新約には、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(ヨハネ第1の手紙4・10)とあり、わたしたちが生きるようになるために(同4・9)神がそれほどまでにしてくださいしたのは、確かに神は、過去のことではなく、今現在、なんとしても「わたしたちの幸せを望み、わたしたちが幸福で、喜びと平和に満たされているのを見たい、見ないではいられないのだ」という思いでおられるということなのではないかと思ひ当たりました。御子のご受難・ご死去・ご復活の出来事は、神のいつくしみとして今、ここで、現実的に、わたしたちに示されていることであると気付きなさい、と。

かたであると同じように、わたしたちもまた、互いにいつくしみ深い者となるよう招かれているのです」。

神の愛と同じ波長をと言われています。他者の幸せを望み、幸福で喜びと平和に満たされているのを見たいといういつくしみに、少しでも同調するにはどうしたらよいのでしょうか。

2 神のいつくしみを告げ知らせる教会の使命。(大勅書12)

「教会には、神のいつくしみを告げ知らせる使命があります。いつくしみは福音の脈打つ心臓であって、教会がすべての人の心と知性に届けなければならないものです。教会のことばと行いは、いつくしみを伝える

るものでなければなりません。教会の第一の真理はキリストの愛です。ゆるしと自らの犠牲に至るこの愛によって、教会は人々のもとで奉仕者であり仲介者となります。したがって、教会のあるところでは、御父のいつくしみを表さなければなりません」。

3 主のことばに照らされて。(大勅書13)

「この聖年を主のことばに照らされて過ごしたいと思えます。それは御父のようにいつくしみ深い者となることです。『あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい』これが人生の綱領であって、満たされ

る喜びと平和の豊かさに比例し、多くが要求されるのです。いつくしみがもてるよう、神のことばをまずじっくりと聴かなければなりません。わたしたちを回心に導くみことばを黙想するために、『沈黙の価値を取り戻す』ことが勧められています」。

4 この聖年のモットー 御父のよういつくしみ深く。(大勅書14)

「いつくしみには、神がどのように愛しておられるかを示すしるしがあります。神は、自分のすべてをいとも無償でお与えになり、見返り何かを求めずは決してありません。神の助けとは、ご自分の存在

を、それもすぐそばにいてくださることを、感じさせてくださることです。日ごと神のあわれみに触れることで、わたしたちもまた、皆に対して思いやりある者となることができるのです」。

5 助けとなる寄り添い を続けられるでしょうか。(大勅書15)

「今日の世界には、どれだけ不安定で苦しい状況があることでしょうか。どれだけの傷が、もう声を上げることのできない多くの人の肉体に刻まれていることでしょうか。この聖年の間に、教会はこれまでにも増してこの傷の手当てをし、慰めの油を塗り、いつくしみの包帯を巻き、連帯としかるべき気遣いをもって世話をするよう呼びかけられることとなります。侮辱を与えることになる無関心、心を麻痺させて新しいことを求めさせないようにする情性、破壊をもたらす白けた態度、そうしたものには陥らないようにしなければなりません。世界の悲惨さと、これほど多くの尊厳を奪われた兄弟姉妹の傷をよく見るために、目を開きましよう」。

結び

現在、世界中でテロによる殺傷事件が頻発し、百万人単位で難民と呼ばれる人が生まれています。本日に悲しいことです。また、

司教日程

1月・2月

- 1・1 金 神の母聖マリア
- 5 火 NPOカリタス釜石理事會
- 12 火 司教評議員會・司祭団役員會
- 16 土 宣教司牧評議員會
- 17 日 北仙台教會
- 18 月 23日ミニコ會書野木修道院 黙想會
- 19 火 教区人権を考える委員會
- 25 月 司祭団月例會
- 28 木 福島ブロック會議 郡山教會
- 29 金 全ベース會議
- 30 土 仙台教区サポート會議
- 31 日 第8地区集會(須賀川教會)
- 9 火 青年勉強會(仙台)
- 10 水 司祭評定例會・司祭団役員會
- 15 月 19日 臨時司教總會
- 22 月 部 落差別人権委定例會
- 29 月 地区別司祭の集い

わたしたちの望み・祈り・働きが神のみ心になつて実を結ぶよう、聖母の取り次ぎを願ひながら、この新しい年を神にささげたいと思ひます。二位の神、父と子と聖霊の祝福が仙台教区の皆さまの上に豊かに注がれますように、お祈りいたします。

2016年1月1日

地区だより

第3地区
宮古・志家・上壺・四ツ家
釜石・花巻・北上・遠野

第3地区大会開催

仙台教区が地区制に移
行してから、第3地区最初
の地区大会が、10月12日
(月・体育の日)四ツ家教
会で開催された。

大会には、平賀徹夫司
教をはじめ、司祭5名、修
道者、信徒ら140名が参加した。
大会のテーマは、「奉献年にあ
つて」。

テーマにそって、ラサールの
ロドリゴ修道士、神言会の暮林響
ぐればやし(こう)神父が、「奉献生
活について」講話した。

昼食後、カリタス釜石の伊瀬聖
子さん、千田榮さん、今村恵美さ
んの、被災地支援の活動報告。結
びに平賀司教主司式のミサが行わ
れた。

第1講話 ロドリゴ修道士

奉献生活年の第1の目的は、「感
謝をもって過去を見る」こと。各修
道会のカリスマに富んだ歴史と、
そのアイデンティティを保つこと。

第2の目的は、「熱意をもって現
在を生きたること。会の創立者にと
つて「絶対的な規範は福音」であり、
「福音を实践すること」が「現代社
会と教会のなかで」求められている。

第3の目的は、「希望を持って
未来に向かう」こと。召命の減少と
高齢化、社会的無関心等の困難に
直面しても、「恐れるな、わたしは
あなたたちと共にいる」と言い続け

てくださる主に信頼して、歩みを
続けること。

◆「奉献生活年」に期待することは、
①「修道者がいるところには喜
びがある」。

②「世を自覚めさせる」こと。

③「私たちの前に立ちほだかる
挑戦」を最前線で受け入れ、
今の社会にある大変なことに
立ち向かうこと。

④自己に閉じこもることなく、片
隅に追いやりられ、助けを待つて
いる人々のところに行くこと。
⑤「神と現代の人が求めている
ものを探す」こと。

◆奉献生活年の展望

奉献生活年のメッセージは、奉
献生活者だけでなく、教会全体に
及ぶ。また、プロテスタントも、
キリスト教以外の宗教にも、広い
人々に宛てられている。家族、友
人間でも、共同生活することが多
いので、共同体の中で自分の役割
を考え、福音の喜びを求めて生活
することが求められている。

第2講話 暮林響 神父

初めの祈りとして、自らギター
を弾いて

「主は水
辺に立つ
た」を歌
った。
修道生
活とは、
ラテン語



ギター一片手に暮林神父

の「religiosus」に由来し、reは「再
び」、「繰り返し」という接頭語、

ligare(繋ぐ)にraをつけて「もう一度
繋ぐ」、「強く結び直す」という意味。

私たちの生活の中で、元来繋が
っていた(私たち同士の繋がり、神
さまとの繋がり)はずなのに、切れ
てしまったとき、もう一度繋ぎ直
すこと。切れた時の涙と、もう一
度繋がった時の涙とは、味が違う。
「religiosus」の生活は、繋がりを
求め、神に照らされながら、その
繋がりを探し求めること。

これは、修道者に限らず、信徒



第3地区大会のミサ

全員の生き方である。

大会の結びとしてミサがさげら
れ、平賀司教は、説教で、「神さま
が呼んでくださったこと、神様の
み心を生きたという使命をいただ
いたことを喜びましょう。キリス
トが、十字架の上でご自分をささ
げ尽くされたように、私たちも、
他者のためにいのちを使い切る、
他者のために自分をささげる生き
方をするからこそ、幸せになる秘
訣です」と呼びかけた。

(四家ツ教会 菅野 耕毅)

第4地区
水沢・大船渡・二関・千厩・気仙沼
米川・築館・新生園

第4地区は仙台

教区の中心地にあ
り、東日本大震災の
被災地(大船渡・気
仙沼)にもなってい
る。

司祭、修道者、信
徒が一致協力しな
がら、地区の活性化
のため鋭意取り組
んでいる。地区担当
の4名の司祭は信徒の多い教会に
居住し、他の小教区には土・日に
時間を調整しながら毎週ミサが行
われるように配慮している。ミサ
の時刻と担当司祭については、地
区長の川崎神父が、毎週各教会に
ファックスで連絡している。

地区連絡会も、年3回程度、司
祭が、居住している
4教会を会場に開
催し、話し合われた
内容は、各小教区に
報告され、共通理解
が図られている。

小教区間の交流
も活発で、水沢教会
の寿庵祭、米川教会
のキリシタン殉教
祭が地域住民と共
に毎年実施されて
おり、地区内の小教区も積極的
に参加して祭りを盛り上げてい
る。昨年、地区内で最も離れてい



地区連絡会 築館教会にて

り」を歌った。

地区内信徒の中で、津波ですべ
てを失い、呆然自失だった折に、
いち早く仙台教区から助成金をい
ただいたとき、筆舌に表されない
ほどの有難さ、信徒としての喜び
を感じたと、何人かの方からお聞
きました。

復興、復旧工事も
着実に進んでいるこ
とを、主の恵みと感
謝しながら、信仰の
道を歩んで行けるも
のと思う。



大船渡教会で築館教会との交流会

これからも、第4
地区が小教区間のつ
ながりを大切に、司
祭、修道者、信徒が
一体となり、助けあ
いながら信仰の道を邁進していく
ことを確信し、日々祈りのうちに
過している。

(築館教会 佐々木英二)

大船渡教会から、築館教会への訪
問があり、ミサをささげた後、近
くのレストランで昼食を取り、交
流を深めた。

今年は、築館教会
が大船渡教会を訪問
した。大船渡教会に
は、多くのフィリピ
ン人の信者がおられ、
生き生きと活動して
おられた。エドガル
神父が、日本語とタ
ガログ語で説教し、
閉祭の歌も全員がタ
ガログ語で「主の祈

仙台教区「新しい創造」第3期の取り組み

仙台教区のホームページが新しくなりました。

URL : <http://www.sendai.catholic.jp/>

新ホームページはエテメ神父の力作です。色彩的にも美しく各ページに写真があしらわれています。さらに、動画も見られますし、英語のページもあります。



カトリック仙台教区 SENDAI CATHOLIC DIOCESE

被災地ツアー 「被災地は今」に参加して

11月9日(月)～11日

(水)の3日間、仙台教区サポートセンター企画のツアー「被災地は今」Aコースに参加させていただきました。宮城県以北の被災地訪問でした。

新聞や映像などで読んだり、見たりして、知っていると思っていた被災地の様子をこの目で見るということは、わたしにとつて、とても大きな衝撃でした。

たくさんの方々から、分かち合いをいただきま

した。実際に津波の間を逃げて来られた方のお話や、

津波で自分の家がすっかり流された方は、「なにも持たない解放感のようなものを感じました」と、

味わいました。おっしゃっていましたが、わたしは、このかたがすごい

神体験をなさった方なのだと思います。また、ご自分も被災されたながら、信者さんや園

児たちの安否の確認に走り回られた方などの分かち合いをうかがいがいながら、教会は生きています、キリストはこの方々を通して働いておられると強く感じました。



高台より被災地を視察 (大槌町)

声をお聞きして、わたしも復興とは何なのか、高い防潮堤を造り、土地をかさ上げしてこれで万全なはずはないのに...と思いました。お伺いしたベースはどこも、その土地で、その人々ともに歩んでおられ、「カリタスさんと呼ばれ

親しまれていると伺い、そこまで行くために、どんなにご苦労があったことかと思いましたが、ベーススタッフの活動と、それを支えておられるサポートセンターの活動に感謝いたします。

この3日間、季節はずれの温かさに恵まれ、恵みのうちに貴重な体験をさせていただきました。

少しハードなスケジュールですが、ご参加なさることをお勧めいたします。巡礼だと思つて...

聖パウロ女子修道会 Sr.荒 貞子

「東日本大震災復興支援 in九州」に参加して

11月3日文化の日、長崎教区の招待で「東日本大震災復興支援 in九州」に参加してきました。

テーマは「友よ、私たちは忘れない」と長崎教区の気持ちで伝わってくる言葉でした

福岡のカトリック神学院で開催されたのですが、神学院は洋風で趣のある素晴らしい建物でもとても驚きました。

長崎教会管区の方たちが、「各ベースの皆さんいつもお疲れ様です。今日はゆっくりして働かないでください」と言われても、ベーススタッフの皆さん相変わらずよく働いていました。

それぞれの東北の被災地の物産市や被災地の事を伝えるブースを準備していくとカリタス全拠点の一体感が生まれてきて、日本のカトリック教会全体(オールジャパ



日本カトリック神学院福岡キャンパス

ン)で復興支援をしてきたのだと強く感じました。

夜は大名町教会で長崎教区の方たちが、交流会を開いてくださいました。今まで米川に来てくれた福岡のボランティアの仲間たちと久しぶりに再会することができました。「一緒に神社の瓦礫を片付けたなあ」とか「人が少ない時、この人と二人でホタテのピン刺しに行ったなあ」とか「この人とお茶



物産市(米川ベース)

つこに行つたとき深い分かち合いをして涙を流していたなあ」など、一人ひとりの思い出が懐かしく甦つてきました。そして普段はなかなかゆっくりと交わることができない各ベースのスタッフ間の交流にもなり、良いリフレッシュの時間が過ごせました。物産市当日、米川ベースも南三陸の乾物や米川の新米など販売させていただきました。

来場者は約1400名もいたそう。南三陸の海の幸は大人気で乾物や食品はすべて完売!「もう残つてないの?」と何度も言われました!

ここでも福岡のボランティアの仲間たちがお手伝いに来てくださり、とても助かりました。お隣の釜石の塩蔵ワカメも完売でした。

バザーの後、駐日教皇大使による野外ミサがあり、ローマ教皇から日本の青年たちへのメッセージを代読してくださいました。遠く九州の方たちがまだ東北を忘れずに、このような機会を与えてくださったことに本当に感謝です。(カリタス米川ベース 千葉道生)

待降節黙想会

宮城県南4教会黙想会

11月29日(日)、白石教会で、亘理教会、角田教会、大河原教会合同の待降節黙想会が行われた。今回は、第6地区青年会と県南教会学校「イエス様のフレンド」



黙想会の講話をする Sr. 中島

ち」共同で行い、50人以上が参加。4教会の講話は、マリアの宣教師フランシスコ修道会



教会学校勉強会

の Sr. 中島から「神のいつくしみと私たちの生き方」についてくしみの特別聖年にちなんで「私たちのテーマで約1時間の講話。『私たちは、愛されている罪人』であること、『隣人を愛しなさい』困っている人には区別なく愛しなさい』など、何となく理解していたつもりだったが、はつきり意識することが出来た。同時進行で青年会は、ラサール

会の Br. ロドリゴの講話 教会学校は Sr. 内田による勉強会が行われた。ホセ神父司式のミサは、参加者で聖堂がいっぱいの中、英語を交えて行われた。ミサ後、聖堂前に新しく設置したマリア像の祝別式も行われた。(白石教会 佐藤 尚義)



祝別されたマリア像の前で

十和田教会が、「登録有形文化財」に

十和田教会が、歴史的建築物としての価値が認められ、8月4日付で、文部科学大臣下村博文より登録有形文化財として正式に認定された。

これを受けて、11月20日(金)、十和田市教育委員会主催の「十和田市を中心とした地域の歴史講座」の一環として、「カトリック十和田教会の歴史」と題した講座が聖堂で開催された。「市広報」の一般募集による40名の参加者は、特に聖堂の説明を興味深く聞いていた。講座後、お汁粉のもてなしで、なごやかなひと時を過ごした。



十和田教会と「登録有形文化財」のプレート

地域に開かれた教会としてアピールできた、宣教活動となった。

ハンセン病問題と仙台教区 人権を考える委員会

新生園教会の歩み①

はじめに12月1日に帰天された津島会長のご冥福をお祈りいたします。

新生園教会の歩みは、1950年(昭和25)年5月、築館教会の大庭征露氏(築館教会創立の功労者・後に南山大学教授)が、園内の路上で布教したときに始まります。

大庭氏の話聞いた有志5、6名が、各々親しくしている人をさそったところ30名位集まり、一週間後に、築館教会主任小野忠亮師が行って話し合い、カトリック研究会を発足しました。

初代会長金善道優氏の部屋で週一回教理勉強がはじまり、会員も増えていきました。

11月、小野師は石巻へ転任、貝沼保師と代わることになり、クリスマスの前に貝沼師と小野師によって20数名が洗礼を受けました。

この時の代父は、築館教会信徒の鈴木忠男氏(築館郵便局長)と坂本敏郎氏(築館病院院長)でした。

12月25日、園内の宮城会館(ホール)に仮祭壇を設けてクリスマスミサがささげられ、研究会を解消して「暁の星雲」となり、宮城会館で月2回ミサをおこなうようになりました。

金道会長は朴訥な人柄で、平成3年に2代会長津島清氏に交代する

まで、長い間、信徒の中心として活躍されました。

1952(昭和27)年4月、宮城会館で、浦川司教と元長崎教区長早坂司教の2人が、30数名に堅信の秘跡をささげました。

9月頃から貝沼師は小野師と協力して、「カトリック新聞」「たいまつ」などを通じ募金を全国の信徒に呼びかける一方、県知事、県議会社などを訪問して寄付募金をおこない、教区からの出資金を加えて、聖堂建設資金を集めました。

1953(昭和28)年4月から、暁の星雲の会員は、他教団会員有志の応援を得て、自分たちの手で敷地整理作業をはじめ5月に終了し、聖堂建設に着手。



新生園教会献堂式 1953年7月5日

7月5日、浦川司教によって献堂式がおこなわれ、新聖堂は汚れなき聖母の御心に奉獻されました。参考「宮城県カトリック教会百年のあゆみ」(御供 真人)



大籠教会の馬小屋

東日本大震災救援・復興支援活動を行ってきた(財)連帯東北・西南の代表 佐多保彦氏によって寄贈されたもの。米国から取り寄せられたもので、像の高さは40〜60cm。

重荷の半分はキリストが…

仙台教区病障連研修会

演題「永遠の命をいきる」
講師 森田 直樹 神父

仙台教区病障連主催の研修会は、11月1日(日)、諸聖人の祭日に元寺小路教会で開催され130人程が参加した。

＝森田師の講演内容(要約)＝



永遠の命は「死んだあとの命」と理解されがちだが私たちは、この世にあつてすでに信仰により、永遠の命をいただいているのです。洗礼によって神様の命、不滅の命をいただいております、神の招きと賜物はとりけされないものなのです。

困難や苦しみ、不自由などについて、キリストは、「周りの人を大切にしなさい」と言っておられます。私たちは、困難や苦しみ、悲しみを持っているが、そこにどまらずに、それを乗り越えて生きなければならぬ。キリストは、「わたしの軛は負いやすく、荷は軽い(マタイ11・29-30)」といわれました。神様は私たちと共におられ、その困難や苦しみの半分を担っておられるからです。

神の招きと賜物は、取り消されないものです(ローマ書)。わたしの中に神様の滅びることのない命が一人ひとりにあるのです。自然を眺めると、冬にかれた草にも命があつて、春になると生き生きと咲き乱れます。水をやると草花はそれに応えてくれ

ます。自然に神のみ業を知ることが出来ます。命は回復するのです。神は、私たちがいつくしみ、愛してくださいとされているのです。

天国は、神と見つめ合うことが出来るところといえるでしょう。神の業を知り、神と出会う場です。これほど幸せなことはありません。私たちは、この世の価値(地位、名誉、お金など)に執着しがちですが、全ては過ぎ去っていくもので、虚しいものです。永遠の命に入るには、この世の命から離れ、この世の執着を捨てなければなりません。

「永遠の命」は、ミサの中で何回も出てきます。待降節、復活節、年間主日の奉獻文の中に40回、不滅のからだ、7回、キリストの命7回、新しい命、14回「イエスの血と肉が永遠の血と肉になる」、「人の子の肉を食べその血を飲まなければ永遠の命はない」、「イエスの血と肉が、永遠の命の糧となる」、等の言葉もあります。永遠の命とは、古い人を脱ぎ捨て新しい人になることでもあります。

私たちが聖霊の導きによって生きるならば、この世にあつていきいきと生きることが出来ます。

「互いに愛しあいなさい」が神の命じておられる生き方です。神の恵みに気付かなかれば、不平不満しか出てきません。私たちは、100%神からの招きに応えられないかもしれないが、神の視点で見、神の恵みに気づき、神を生きることが隣人愛を実践することになります。

神さまは、私たちの額に印を押し、押し続けてくださっていることを大切に思い、神さまへの全き信頼を持って生きましよう。

(釜石教会 小野寺 哲)

ロゴス研究所講演会

現代文化と神のみ心がクロスする家庭

「いのち・信仰と文化のゆりかご」

講師 M. P. ジョルジョ神父

仙台ロゴス研究所主催の第26回講演会が11月15日午後、北仙台教会信徒館にて講師にザビエル宣教会のマンニ・ピエール・ジョルジョ神父(大阪貝塚教会)を迎え、約40名の参加を得て開催された。

講師のマンニ神父は、23歳で来日し、51年間、各地で宣教されている。また、カトリック日本幼稚園連盟の委員長等の幼児教育・学校教育に関わる要職を長年務められている。大阪弁のユーモアに溢れた話は時の経つのを忘れさせた。

以下、講師が用意されたレジュメから一部抜粋する。

●十字架の提案

家族は、一人ひとりの心に蒔かれた「神のみ言葉の種」が成長する場であると同時に身勝手な行動やさからいに陥りやすい人の集いである。即ち、家族は、善と悪(罪)の両面を同時に体験し、喜びと絶望、生と死を生きる「共同体」である。

●婚姻の秘跡は生涯において徐々に成就するもの

婚姻は「結婚式」や「結婚宣言」の一瞬・ひと時の秘跡ではな



くて、一生涯の内に成熟し完成する秘跡です。

●信仰が異なる夫婦について(エペソ7・14)
「なぜなら、信者でない夫は、信者である妻のゆえに聖なるものとされ、信者でない妻は、信者である夫のゆえに聖なるものとされているからです。そうでなければ、あなたがたの子供たちは汚れていることになりませんが、実際には聖なるものです。」

●家族の破壊

①家族の負担の増大化。一九八〇年代以降は、夫婦の共働きが一般化した。それによつて育児や子育てが、保育園や児童クラブ、地域の野球クラブやサッカー、スイミングスクールなどのスポーツクラブ、学習塾などに一時的に委託されることも増え、性別役割分業の見直しが進みつつある。また、高齢化社会に伴う老親の扶養や介護の問題も深刻化してきた。

②家族制度そのものを否定する人、そして未婚のままの生活設計が一般化している。

③人間一人ひとりの尊いのちや人間性を守る倫理的ルールを持たない政財界の自己利益追求文化が人間社会を支配している。「劣っているもの」や「負担になっている者」は処分される。貧しい国・家族・人々、及び負担になっている障害者・高齢者・難民などがその犠牲になっている。

④「いのち・信仰と文化のゆりかご」である「家族」を守り、支援することはカトリック信者の役割である。

あけの星会・講演会 「食の靈性」心を育てる食

講師 伊藤 幸史 神父

11月18日(水) 講師に伊藤幸史神父(東京教区・糸魚川教区)をお招きし、元寺小路教会に130名が集い「食の靈性」を学ぶ講演会が開かれた。去る五月に日力連熊本總會があり、その時伊藤幸史神父の講演「食の靈性」で味わった感動をぜひ仙台でと、あけの星会が企画、日力連の後援も得て開催となった。

伊藤神父が「食」を語るきっかけについて「9年前、那須塩原のアジア学院での自然体験と、この20年間、求道者受洗者が半減している教会の崩壊状態に、立て直しこそ急務であることから、新たな信仰の道を探し求め、【食の靈性】に解決のヒントがあるのでは?にたどり着いた」と始めの挨拶があった。そして「現代社会の最たるものの一つに心の悩みがある」と言葉を続けられた。



「命は大切だ!と言われ
るより一言ある
なれば大切!
と言われると
心にエネルギー
が与えられ
生きていける。
その【生への
肯定感】を
育む根本とな
るのは日々の
食にある。
お弁当は生

への肯定感を育て、今悩み苦しんでいる人々に【あなたは大切】と伝える力がある。子供は食卓であなただけ大切!という愛情も食べて育つ。美味しいものを食べるのだから美味しく食べることが大切なのだ。



図表を示しながら説明する伊藤神父

【日々
の食】を通
して神さ
まとの交
わりを深
めること
が大事で
ある。カト
リック教
会では食の

宗教ではないだろうか。最後の晩餐という食卓の再現である『ミサ』を信仰の中心とし、パンとぶどう酒という食べ物を「聖体」としていただいている。【食】は人、自然、社会とイエス様によるつながりの窓口であり食には世を救う福音が秘められている。この食によって便利さや豊かさに隠れた孤独感からの解放をめざし、現代社会の心の闇に光を注がなければならない。その使命が【食の宗教】のカトリック教会にあるのではないだろうか。

【食】には人生を変える力がある。「足元の小さなところから見つめ直していくことができれば、宣教にもつながって行くのではないだろうか」と話を結ばれた。

2時間におよぶ講話と映像に参加者は深い感銘をうけて、アンケートにペンを走らせた。「日々の食卓の大切さを子供と孫にも伝えていきたい」「食の学びが、私のやる気をおこしたようです」「冬は鍋で家族団欒も

いいですね!・・・参加者は大切な昼食を共に食べ、午後には感謝のミサにあずかり閉会となった。

(元寺小路教会・日力連理事 中西 栄子)



八木山教会 馬小屋

「2002年冬から、再建された教会の聖堂右隅に飾ようになったイタリア製の馬小屋」



一本杉教会 馬小屋

祭壇のわきに飾られた馬小屋。シンプルに白い布を敷いた台の上に、白と赤のランピオン。背景に夜空と大きなベトレヘムの星をクレパスで描いた。光の当たり方や見る角度で金色や銀色に見えるから不思議。

地球温暖化対策への期待

最近の国内外の異常気象は、地球温暖化と関連すると考えられており、昨年11月末からCOP21(気候変動枠組み条約締約国会議)がパリで開催され、会議のまとめが「パリ協定」として公表された。今回の会議で注目されるのは、先進国と共に途上国も関わる点で、1997年京都で開催されたCOP3では、先進国のみが二酸化炭素CO2を主とする温暖化ガスの削減目標を策定したが、今回は、今や最大のCO2排出国である中国など途上国も削減目標の設定に加わった。

さらに、産業革命後の世界の気温について、温度上昇を1.5℃未満に抑えるという大変意欲的といえる目標が設定され、各国は温暖化ガス削減目標をそれぞれ定め、5年毎に見直していくことが決った。

日本は、東日本大震災後、ほとんどの原発が稼働停止しているために火力発電の比率が増大し、削減目標は、2030年段階で26%削減(2013年比)に留まっている。エネルギーは各国の経済発展にとって欠かせないものであり、また、排出ガスの削減には多額の資金も必要で、各国の「目標値」が実現するには課題も多いが、これからの地球全体の発展を考えれば、フランスコ教皇様もこの会議の成功を祈られたと報じられているように、各国の真摯な取り組みが強く求められる。

地球を大事にする会 松永利昭



ひと足お先にクリスマスイルミネーション点灯式

光が丘スベルマン病院

光が丘スベルマン病院ホスピスの応援を柱にして活動している私たち「春風の家」として、12月は特別な季節となっています。

中でも一番の大きな行事が、毎年東仙台教会をお借りして開いている、「二足お先にクリスマス」と題した催しとスベルマン病院イルミネーションの点灯式。今年は10回目を記念して、12月5日、仙台フィルの4人の皆さんをお迎えし



仙台フィルのカルテット演奏

ての弦楽四重奏という、私たちにとってはこれまでにない贅沢なコンサートを開きました。その音色はさすがプロ！おなじみのクラシックの名曲からクリスマスにちなんだ曲まで、すばらしい演奏と楽しいおしゃべりを交えての1時間でしたが、今回は近隣の老人施設の方々も車椅子で、あるいはヘルパーさんに付き添われておいでになり、用意した100人分のプログラムも足りなくなったほどのお客様

で会場が埋まりました。アンコールの最後には、聖歌「いつくしみ深き」を3回も演奏して頂き、私たちもその演奏に合わせて合唱するという思いがけない流れに、目頭をそっと押さえていらした方もおいでになった程、感動的で心温まるコンサートになりました。これまで仙台フィルとは縁のなかつた方も、きつと今回のコンサートを通してその存在がより身近になったに違いありません。来年もまた聴きたいというお声も事務局には多数届きました。

またコンサートの始まる前には、地元東仙台で整形外科を開業している、佐藤医師によるお話の中で、年を重ね耐用年数(?)を過ぎた、骨や関節、筋肉などのいわゆる運動器でも、日頃から運動などを心がけて行うことによって健康寿命は伸ばせますという心強いアドバイスも頂き、ロコモ体操では会場の皆さんと一緒にちよつぱり気持ちの良い汗も流しました。

夕闇が迫るころ始まった点灯式では、子どもたちによってイルミネーション点灯のボタンが押されると、一年ぶりに病院の庭は光であふれ大きな歓声が上がりました。イルミネーションは1月14日までの毎日、夕方4時半から夜10時まで点灯することになっています。

これらクリスマスシーズンに私たちが開いている催しは、仙台教区の皆様を始め、お顔を存じ上げない大勢の一般市民の方々か



健康寿命を延ばすロコモ体操

らの寄付によって支えられています。

今年も多くの方々のご支援とご協力に心から感謝しながら、一連のクリスマスイベントを終えました。

(春風の家 小野 敬子)

2016年東北復興

応援カレンダー

仙台教区サポートセンターでは、東日本大震災の被災地で活動しているカリタスベース等の活動を多くの方に知っていただくために「東北復興応援カレンダー」を制作しました。

2016年3月から2017年3月までのカレンダーです。これまでは「復興支援カレンダー」として作成してきましたが、2016年に震災から丸5年という節目を迎えるにあたり、被災地を忘れないでいただきたい、被災地で暮らす方々が前向きに進んでいけるようこれからも多くの方に応援を続け

新刊紹介

子どもたちと読む聖書
百瀬文見

「イエスさまはどうして十字架にかけられたの?」「1日のために命を捨てたの?」「何を愛するな?」
子どもたちの疑問にわかりやすく丁寧に答えるから、親の悩みに答える本!

子どもたちと読む聖書

著者 百瀬文見著／発行 女子パウロ会／定価 1100円十税

本書は、月刊誌「あけぼの」に掲載されていたものを著者が加筆し、単行本にしたものです。著者は、イエズス会の司祭で、長年、上智大学で教鞭をとっておられますが、現在は広島教区の司牧現場で活躍中の有名な神父様です。その現場から生まれたものが本書です。

子どもたちは、「どうして?」「なぜ?」を連発します。大人たちが思

日	月	火	水	木	金	土
6	7	8	9	10	11	12
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

教区報原稿送付メール変更しました。
【iwaimak@yahoo.co.jp】

編集後記

いもよらない質問を、司祭や日曜学校のリーダーに投げかけます。そんなとき、皆さまは、どう答えておられますか。本書はそのような、子どもたちからの質問、疑問にどう答えればいいのかを示唆しています。福音書のイエスさまのご生涯のいくつかの場面、たとえば、ベツレヘムでの馬小屋、3人の博士たち、12歳のイエス、洗礼など。その他、イエスのなさった奇跡やたとえ話など20のお話がかかれてあります。引用されている聖書の言葉のほとんどが、子どもたちを念頭においた、著者の手による翻訳になっています。この本をきっかけに、子どもたちと聖書を一緒に読む習慣を身につけられたら素晴らしいことですね。今年も聖書に親しみ、神の慈しみを深く味わう年でありませうように。

主のご降誕と新年おめでとございます。今年も教区報をよろしくお願いたします。

昨年11月末、突然メールが開けなくなりしました。いろいろ回復を図ったのですが、どうにもならず、仕方なしにメールアドレスを変更しました。前のアドレスに原稿など送られた方には大変申し訳ありませんが、今回は掲載できませんでしたので、もし次号3月発行掲載でよろしければ、上のアドレスに送ってください。

今年はいつくしみの特別聖年」にふさわしい良い年になりますように祈りたいと思います。(岩井)